

# 北但大震災の概要

大正14年5月23日午前11時9分57秒、豊岡・城崎方面に烈震があり、初めは水平動、次に上下動となって多数の家屋が倒壊、間もなく火を發し、火は24日未明に及んだ。震源地は円山川河口数マイルの深さ50km前後のところ、マグニチュード7（現在は6.8とされている）と言われている。

被害は、人家・人口が密集する豊岡町で大きかったのは当然であるが、総戸数・総人口に対する被災比でみると、震源に近い港地区が最大で豊岡町がそれに次いでいる。【豊岡市史より】



盛んに燃えつつある町を逃れて豊岡小学校校庭に集まった避難者

# 被害状況



飛行機上より見たる豊岡町の地震火災



豊岡の寺町通りの焼け跡

従来、但馬には大地震はないと信じて生活して来た住民が未曾有の激震に遭遇し、或は肉親を失い、或は着の身着のままで焼け出され、夜になっても寝る所もないという有様でそのショックは名状し難いものがあり、一時は茫然自失の状態にある者もあった。

この被害状況は、地震2分後に豊岡郵便局長が「ただいま地震あり倒壊家屋多数」と大阪通信局長に打電したのを第一報に、兵庫県庁や東京にも伝わり、火災の煙がまだ立ち上っている頃早くも新聞社の飛行機が飛来し、間もなく日本全国はもとより外国にも報道された。【城崎町史より】

# 被害状況



豊岡駅前から見た火の手



豊岡駅前の被害

初め豊岡、城崎方面は水平動を来し、震動急激にして上下動となり、たちまち多数の家屋が倒壊するとともに瓦礫、砂塵を飛散し実に凄惨な光景となったが、しばらくして火を発し、修羅場と化した。

しかも火勢は時を経るにしたがい益々猛威を奮い、ほとんど全町を火でおおい、到底手を尽くす術がなかったが、多数の救援団の協力を得て消防に努めたため、豊岡町は翌24日未明に火勢が衰え、同日午前鎮火した。

城崎町は消防の術なく、24日未明に全て灰燼に帰し、見渡す限り焼土と化した。

【北但震災誌より】

# 被害状況



豊岡町の倒潰家屋



豊岡町駅前の倒潰

|     | 総戸数   | 全壊  | 半壊  | 破損<br>(%)     | 焼失<br>(%)     | 合計<br>(%)       |
|-----|-------|-----|-----|---------------|---------------|-----------------|
| 豊岡町 | 2,178 | 234 | 171 | 489<br>(22.5) | 993<br>(45.6) | 1,887<br>(86.6) |

【豊岡市史より】

# 被害状況



美含銀行(現但馬銀行)倒潰



豊岡町来仰寺の焼け跡

震災区域内にある銀行は、支店や営業所を豊岡、城崎両町に置いていたため、建物はもちろん、金庫、重要書類さえすっかり無くなってしまったものも少なくなく、一時休業がやむを得ない状況であった。

金融機関は、応急復興に関する原動機関であり、生活上必要不可欠であり、各銀行とも非常時でも預金支払いの準備を整え、6月上旬までにほとんど全部が開業した。【北但震災誌より】

# 被害状況



玄武洞の震害



被害を蒙る玄武洞

地震の激しい揺れにより、大量の玄武岩が崩落して洞をふさぎ、柱状節理も屈曲してしまうほどであった。

# 被害状況



墓石の倒壊

豊岡町内に存する來迎寺、立正寺、自性院、真光寺は全焼し、安楽寺、養源寺は附属建物の一部が焼失した。【北但震災誌より】



掘り抜き井戸の砂噴出

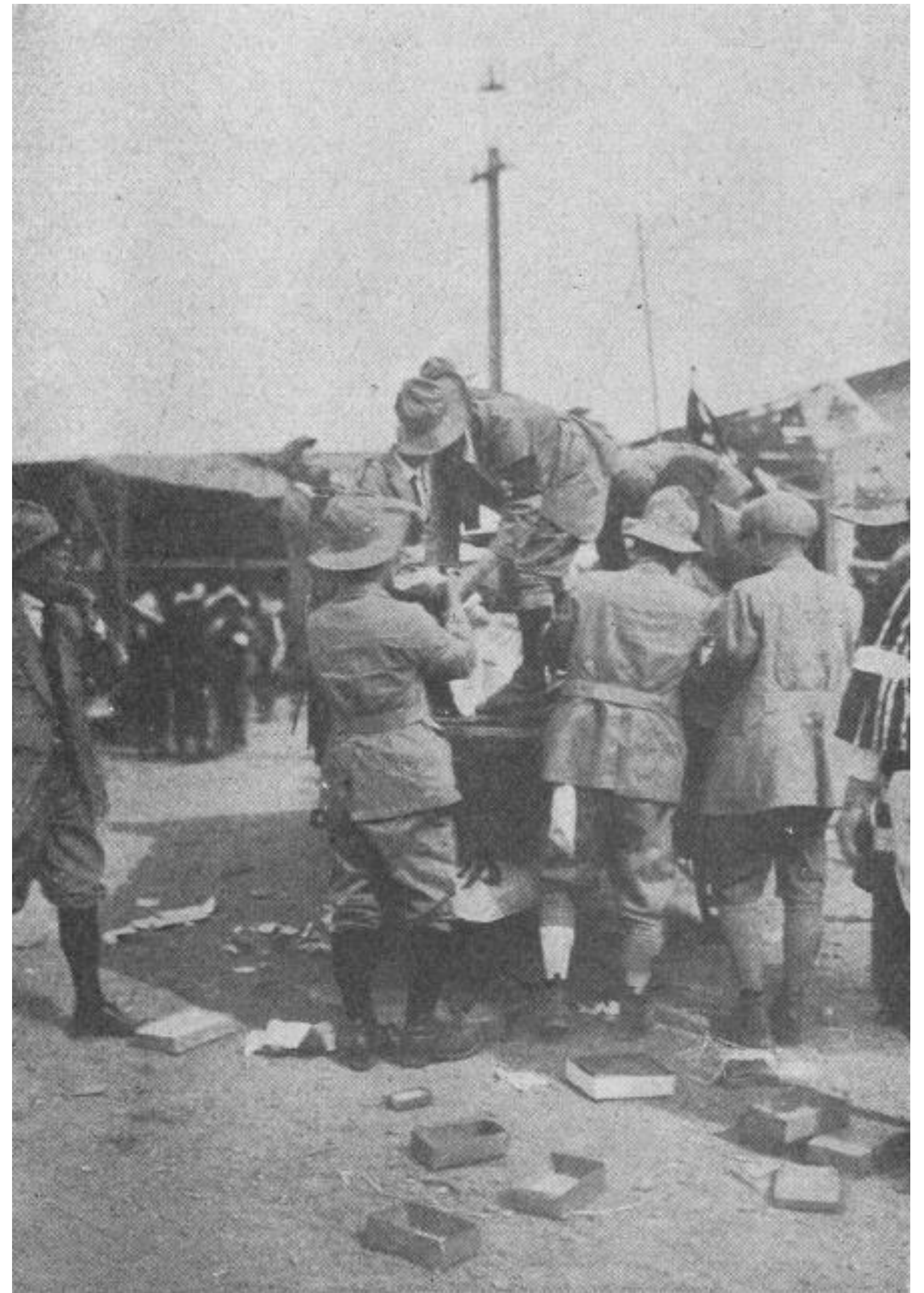
# 災 害 支 援



消防夫の警戒

日本全国から人的援助や義捐金などが寄せられた。

当時から現在の消防団にあたる人たちによる警戒やボランティアとして神戸から青年団が支援に駆けつけている。



神戸橘町青年団の活動

# 災 害 支 援



救援海軍派遣隊



救援軍隊の到着

但馬地方の震災の警備及び復興事業のため、舞鶴要港部より軍艦春日、駆逐艦榎を派遣し、軍隊の出動は福知山聯隊一個大隊(23日午後11時豊岡着)、鳥取聯隊二個中隊(24日午前1時城崎着)、岡山工兵隊及び姫路聯隊二個中隊(24日早朝豊岡着全員出動)であった。

【但馬丹後大震災写真画報（大阪朝日新聞社）より】

# 災害支援



兵庫県救援団の活動



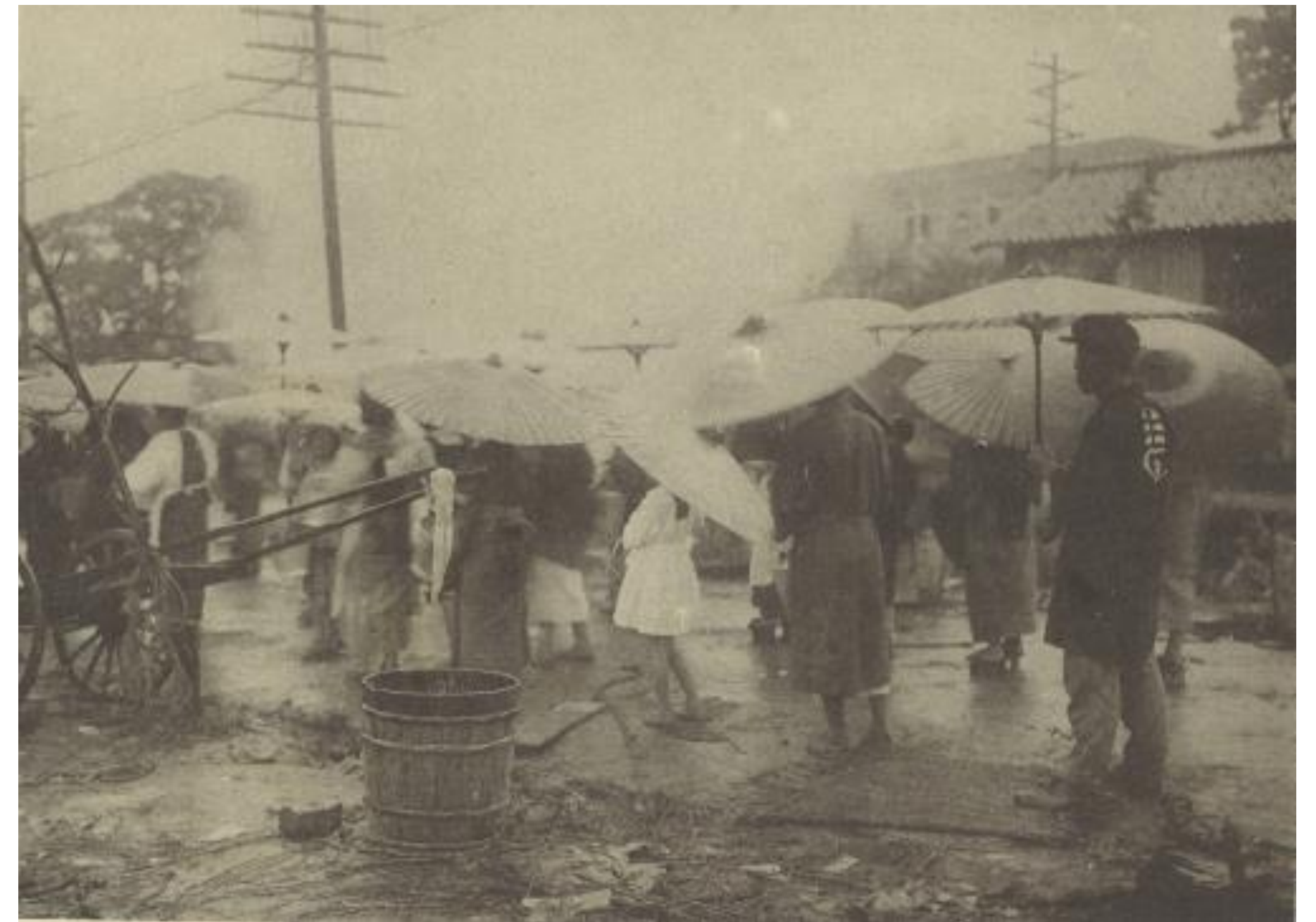
救護団事務所(豊岡小学校)

被災地以外の兵庫県内市町村から人的支援、物資輸送、義捐金等の応急措置が講じられた。

# 災害支援



婦人会による義捐金の募集



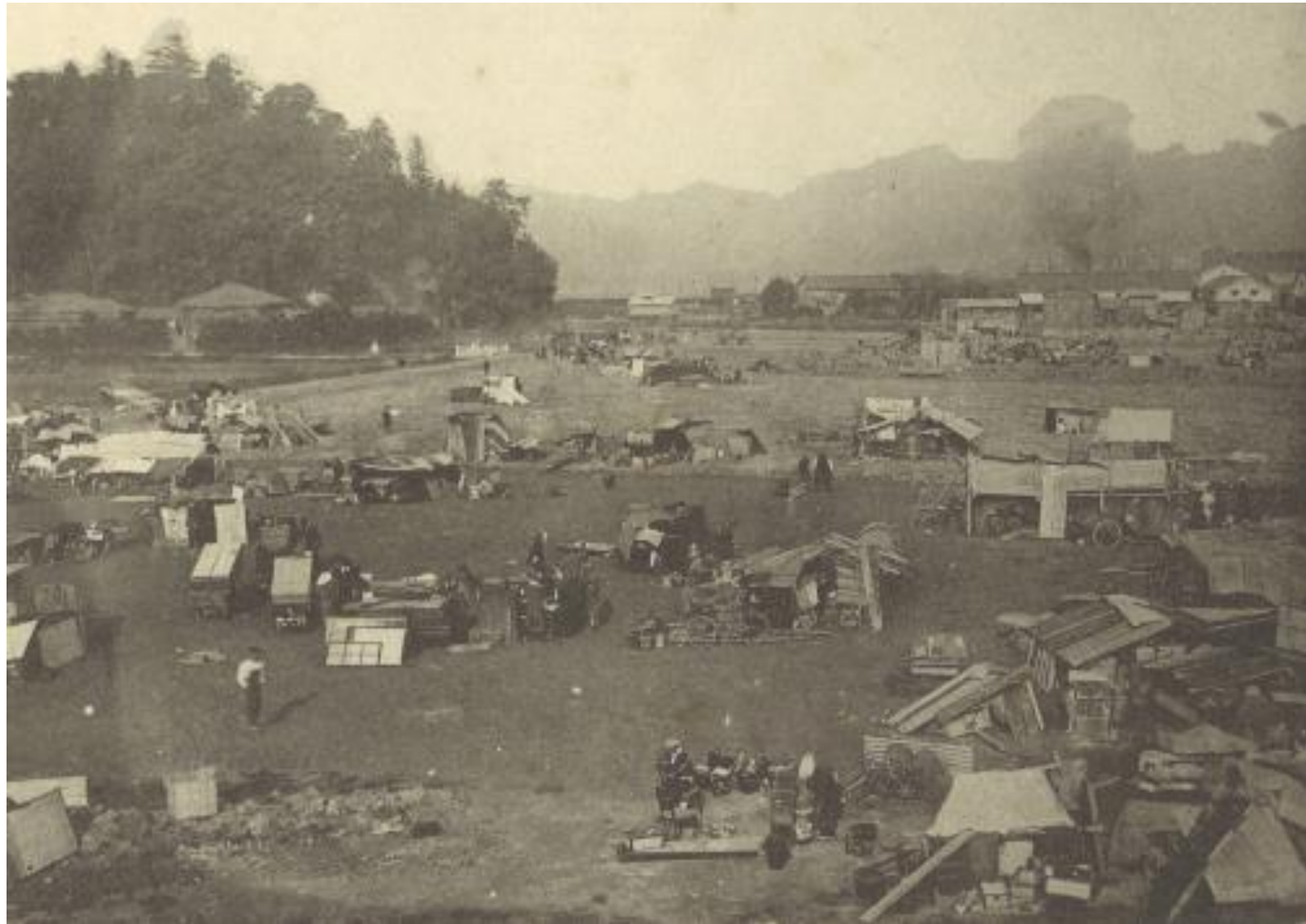
雨中の配給



市内から寄せられた支援物資

災害に対して国の内外から公私の救援の手が差し伸べられた。このほか、食料品・衣類・日用品など、また慰問袋もぞくぞく送られて来た。

# 避難者の様子



避難する被災者



避難する被災者

家屋の被害は一般に木造建築物だった。降雪や出水が多い地域性から二階建家屋が多く、震動によって家屋傾斜や倒壊が発生した。【北但震災誌より】

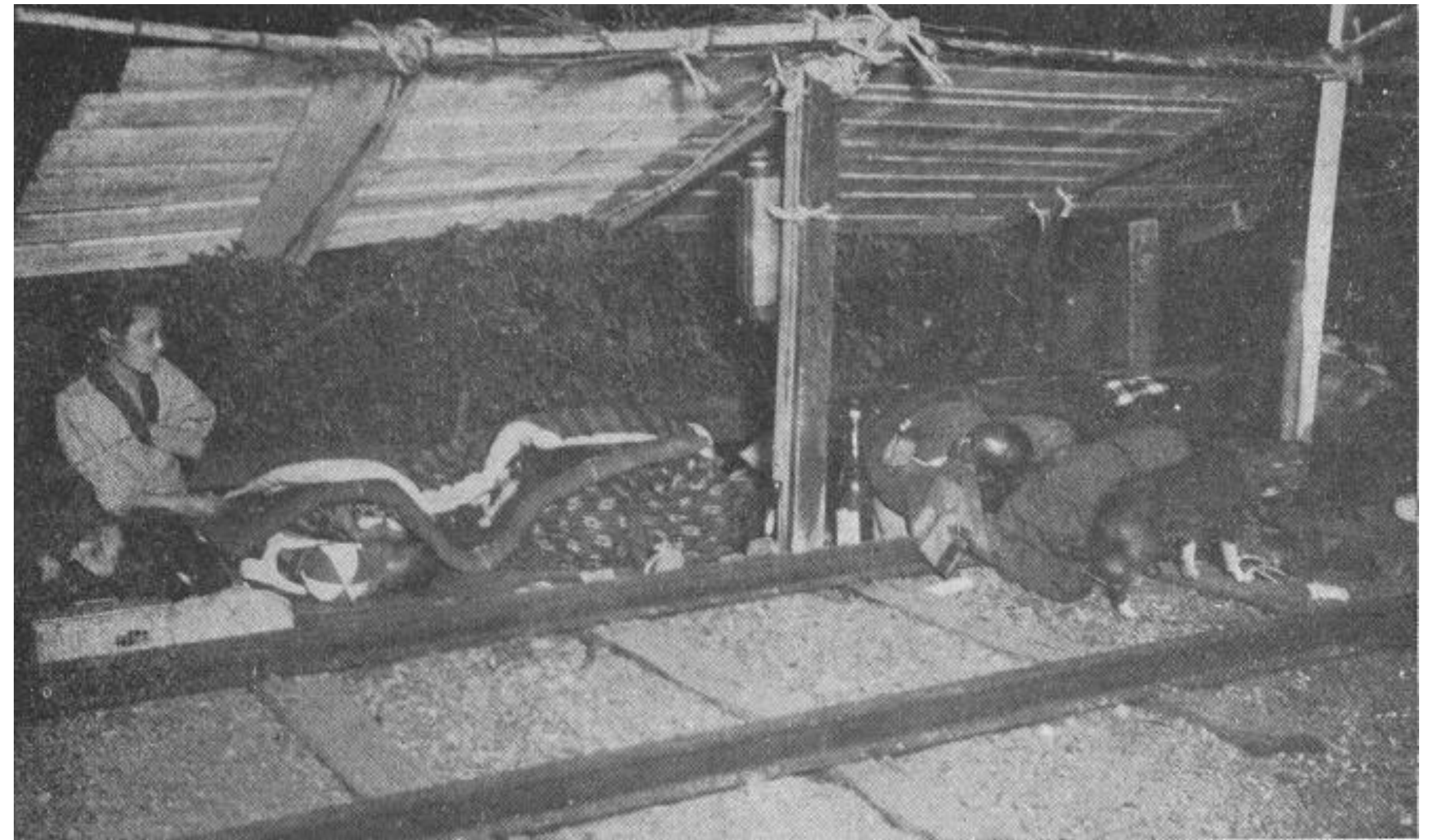
# 避難者の様子



レールに小屋掛の被害者

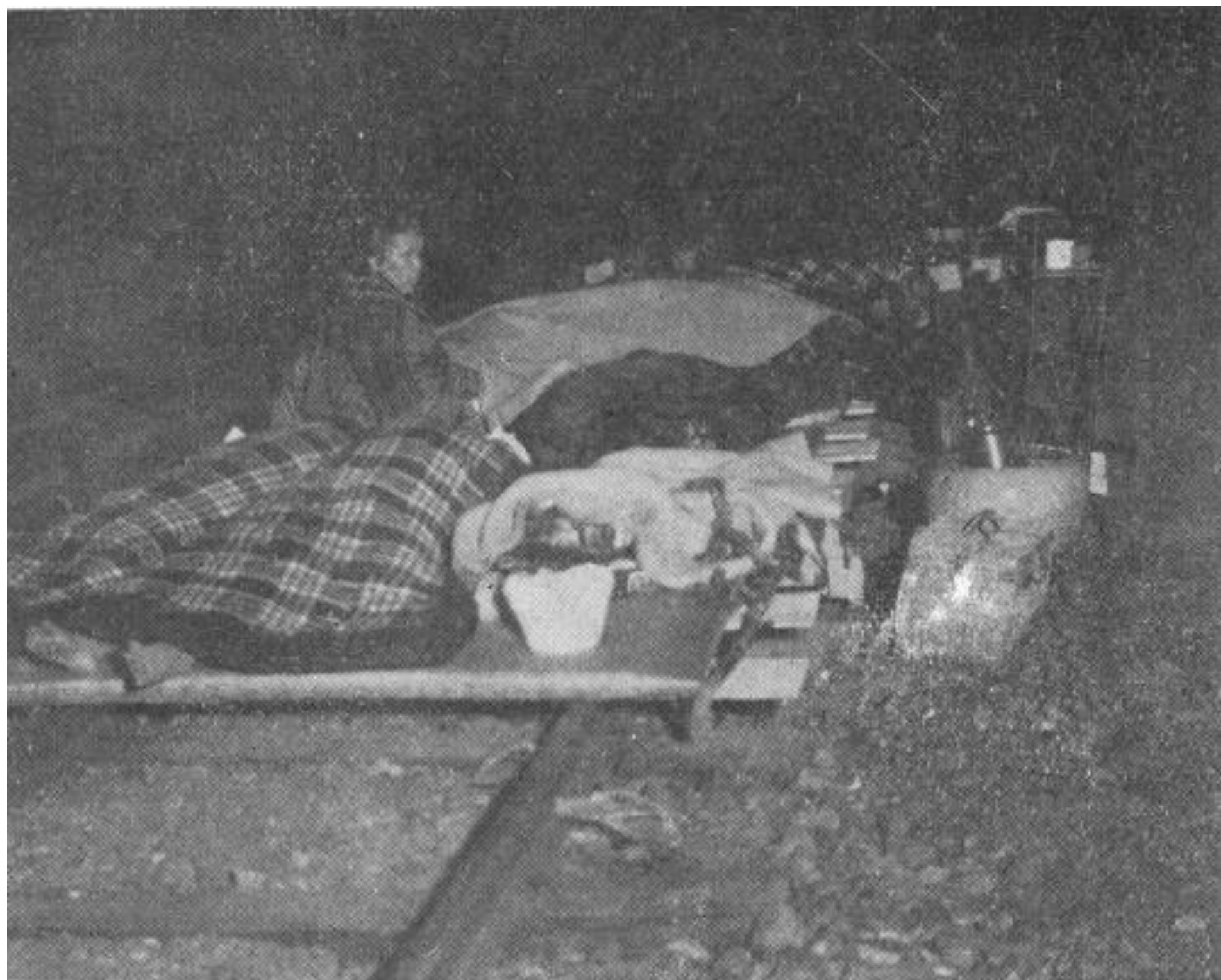
余震や火災の危険から身を避けるかのように  
鉄道のレール上に仮設の小屋を建て避難する  
人々の姿である。

小学校などの避難場所がいっぱいだったの  
だろうか。



レールの上に寝る避難者

# 避難者の様子



レールの上に寝る避難者

鉄道のレール上で疲れ切った体を休める人や、身を寄り添って竹林の中に避難される人……。

震災によって何もかも失った人たちの姿がここにあった。



竹林中に夜を徹する避難者

# 避難者の様子



露天に夜を徹す被害者

震災によって焼け出された人たち。身の回りの家財道具をやっとの思いで持ち出し、露天での生活を余儀なくされている。

右はバラック小屋を建て、生活を始める人たちである。



急造のバラック小屋

# 避難者の様子



豊岡小学校の広場における避難者



豊岡小学校前の避難者

各中等学校生徒は授業中であつたが、幸い1名の負傷者もなかつた。一時混乱の状態にあつたが、直ちに秩序を回復し、豊岡中学校、豊岡高等女学校生徒においては、進んで罹災者の救護に当たつた。

当時、学校は罹災者の収容所に充てられていたため、授業は一時停止したが、各方面の整備が整うにしたがつて再開された。【北但震興誌より】

# 避難者の様子



大阪駅に着いた震災避難者



大阪駅に着いた震災避難者

震災によって自宅や家族を失ったり、けがを負った人々が、遠く親戚等を頼って大阪へ来られたのだろう。

# 避難者の様子



東京方面へ旅行中に豊岡町全壊の報を聞き、引き取りの父兄を待つ豊岡高等女学校生徒



東京の修学旅行から戻った女学生皆泣く

豊岡女学校生徒130名は震災前二組に分かれて東京方面と山陰地方へ修学旅行に出かけたが、豊岡全滅との報を聞いて24日午前8時過ぎに前後して豊岡に着いた。出発のときと打って変わった町の惨状に早くも少女達の胸は潰れたが、さらに駅に出迎えた父母兄弟の姿をながめて涙を誘われる者もあり。

それよりも旅行の留守中に亡き人の数に入った骨肉の話を聞いて人前もはばかり泣き崩れる様は目も当てられなかった。

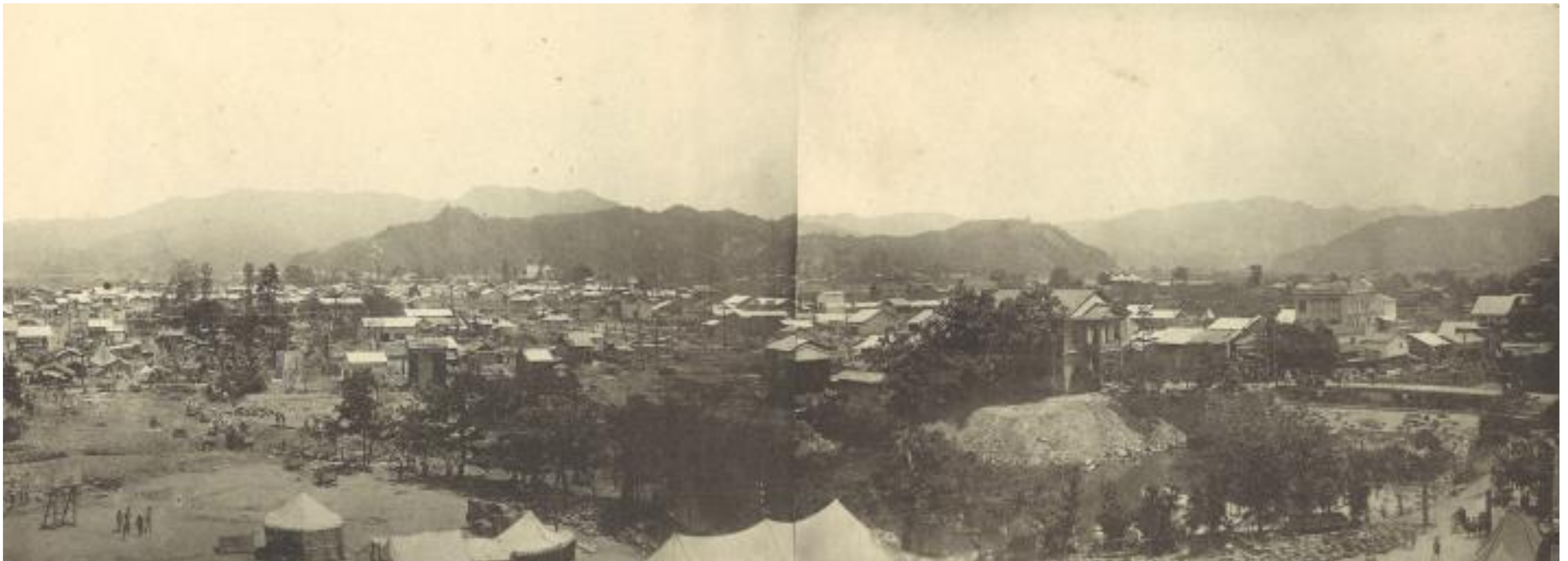
【但馬丹後大震災写真画報（大阪朝日新聞社）より】

# 災害からの復興

震災後、兵庫県は直ちにバラック住宅建設を進め、震災者の応急の住居にあてた。豊岡町で12カ所に60棟600戸、津居山・瀬戸に170戸であるが、1戸(5名以上収容)あたり3坪という狭いものであった。

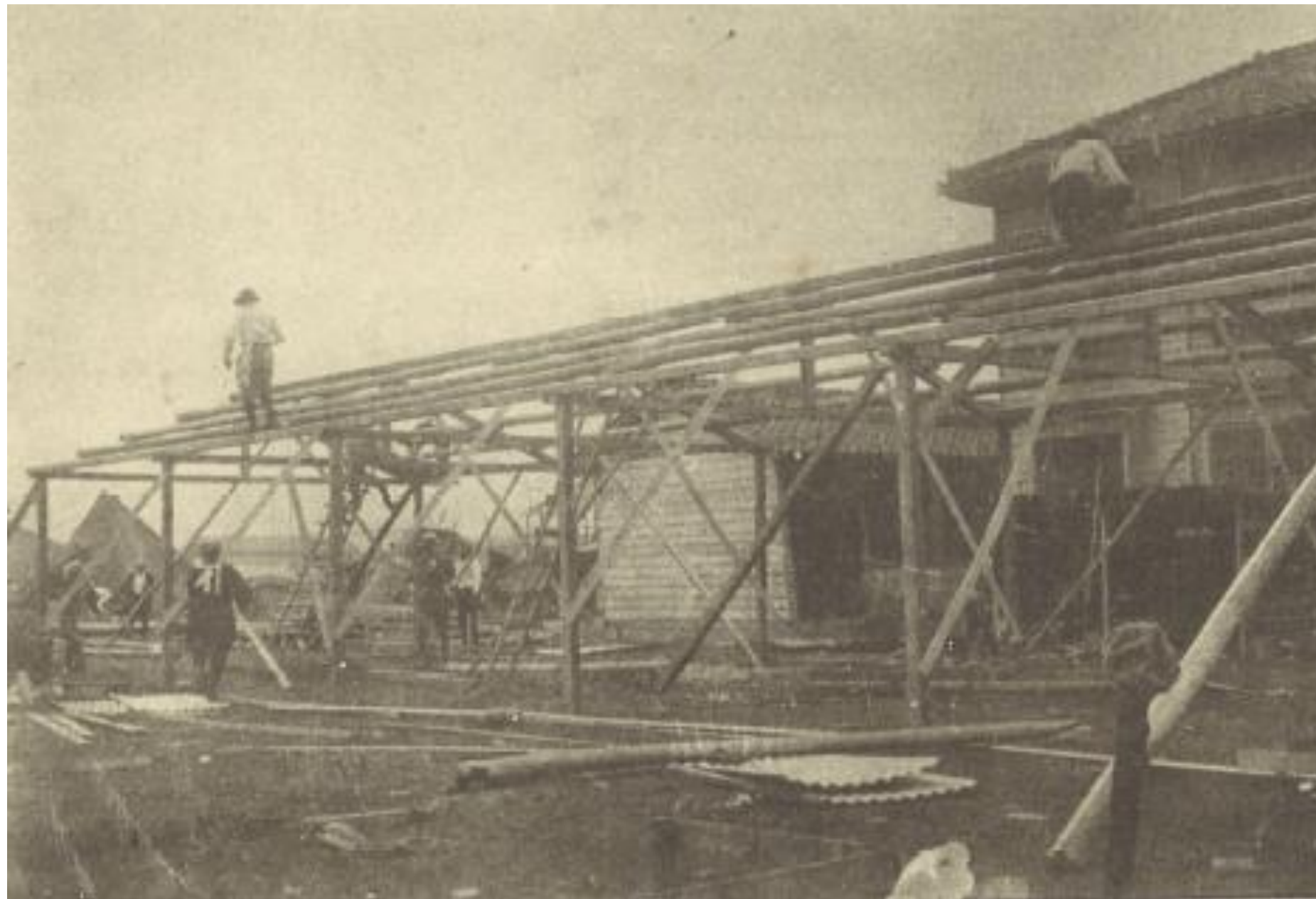
豊岡町の600戸に対し申し込みは2,000件に及び、小田井の23戸123人の申し込みには20戸が配当された。貸与期間は、大正14年6月から7月31日までという緊急避難用ながら賃借料は無料で、期限後は家賃月額2円という条件であった。

【豊岡市史より】



仮住宅建設中の豊岡町

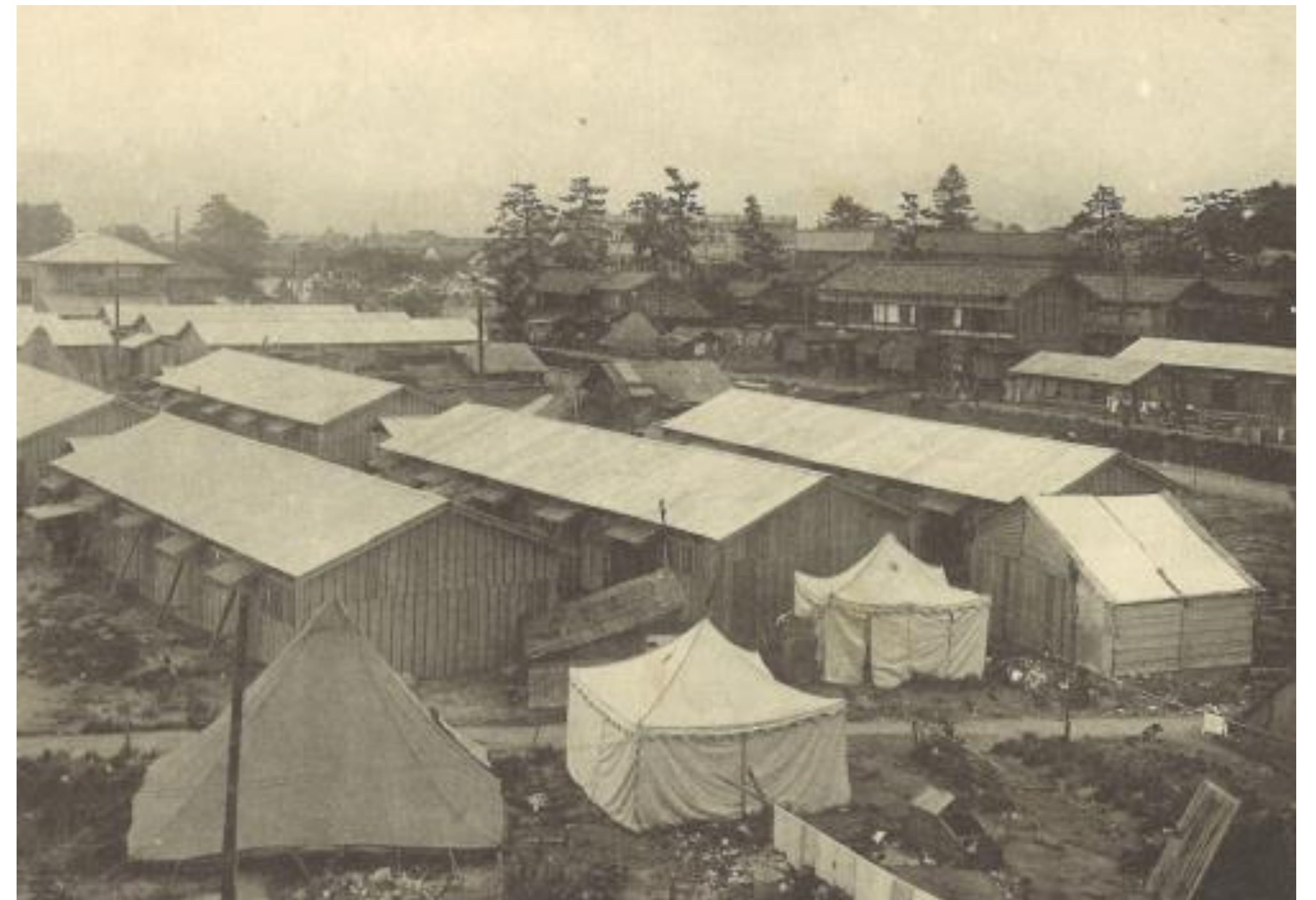
# 災害からの復興



最初の県営バラックの棟上げ(豊岡町)



県営バラックの建設



県営バラック(豊岡町)

県が進めたバラック建設工事は着々と進み、6月4、5日頃にはテント及び寺院等の避難所から順次引き移り、同月10日頃には避難者がバラック街に充満するに至った。

【北但震災誌より】

# 災害からの復興



露天で小学校の授業



豊岡小学校の野外教授

城崎郡内各小学校共その被害を蒙らないものはなく、特に、城崎小学校は全焼、港西小学校は倒壊により死者数名を出した。

豊岡、港東、新田第二、八条、田鶴野各小学校は、いずれも校舎が破損し、バラック又は適宜の建築物により授業を開始した。【北但震災誌より】

# 災害からの復興



御差遣の黒田侍従(豊岡町)



豊岡中学校庭の避難者を見舞う黒田侍従一行

北但地方の震災の惨状をお聞きになり、天皇皇后両陛下と攝政宮殿下は、深くお心を痛められ、黒田侍従を御差遣わされた。

黒田侍従は5月26日午前9時25分に神戸駅に到着後、兵庫県庁で平塚廣義知事に御救恤金3萬5千圓を伝達され、平塚知事と共に被災地へ向かい、午後3時45分に豊岡町に到着された。侍従は、兵庫県救援支部豊岡中学校、豊岡病院をはじめとして罹災地区を一巡し、親しく罹災者に慰問された。

【前段 但馬丹後震災画報（大阪毎日新聞社）、後段 北但震災誌より】